

アルゲートオンライン

～侍が参る異世界道中～

2

touno tsumugu

桐野 紡

主役登場人物

アネツテ

エルフの精霊術士。
人攫いによって連れ去られたところを、
リキオーに助けられる。

紫色の竜

獰猛な性格の雑竜。
ブルードラゴンに実力では
勝てないため燃えている。

マリア

謎の多い美女剣士。
以前は王宮の騎士だったらしい。

コンラッド

王都の最高級ホテル
「シェラザードホテル」の優秀な
コンシェルジュ。

ハヤテ

リキオーに飼われることになった、
狼モンスターの子ども。成長が早い。

リキオー

VRMMO「アルゲートオンライン」の世界に、
侍として転生してきた普通の青年。
豊富なゲームの知識でチートに遊び尽くす。

イエニー

ブルードラゴンが人間に変化した姿。
年齢は 3426 歳。
水竜神殿に住んでいる。

カミル

王宮直属近衛騎士団の騎士。
とある事情でリキオーを
追っている。

1 引っ越しを考える

リキオーはユシュト村の自宅の庭で、大きな鍋を使って木の皮を煮込んでいた。しばらくすると木の繊維質がぐずぐずになる。それを取り出し、糊と混ぜて紙漉きをはじめる。漉く、薄く延ばす、乾かすなどの工程を経て、ようやく紙らしきものができた。しかし、その品質は良いとはいえない。現代日本で手に入るような真っ白い紙ではなく、色が付いて表面はでこぼこしているのだ。

まあ、自分で使う分には気楽に扱えるのでちょうどいい。メモ帳代わりにはなるだろう。そう考えて、リキオーは紙漉きをひと休みする。そして、リキオーのすることを不思議そうに見ていたアネツテに目をやった。

アネツテはエルフの精霊術士でリキオーのパーティ「銀狼団」の一員。人攫いに捕らわれていたところを助けて以来、ともに生活するようになった。ちなみに銀狼団には、あと一匹メンバーがいるのだが、おそらく近くで遊んでいるんだろう。この場にはいなかった。リキオーがアネツテに話しかける。

「うーん、もう一人、パーティに誘おうかな」

急な提案に驚いたアネツテが、思わず大きな声を上げる。

「えっ！ 急に、な、なんですか？」

「いや、アネツテがドジ踏んで襲われそうになることって多いだろ」

リキオーがいじわるなことを言う。

「……そうですね」

涙目で棒読みの返事をするアネツテに、リキオーが説明する。

「パーティ構成として回復役がアネツテ、遊撃役がハヤテと俺。そうになると盾役がいらないだ」

盾役とは敵の攻撃を一手に引き受け、他の仲間を守る役目のことである。基本的なパーティには必須の役割といえるが、銀狼団にはいなかった。

「つまり盾役の人を入れるってことですか？」

無言で頷くリキオー。それを受けてアネツテが言葉を継ぐ。

「となると、ギルドで募集するんですね。盾役なので男の人なんでしょうか？」

「そうだなあ……」

当初、リキオーは王都の冒険者ギルドでパーティ募集をかけたほうが安上がりだろうと思っていたが、彼には彼なりの問題がある。

例えば、パーティメンバーのステータスを底上げできるという能力が他に漏れたらヤバイだろう。

また、生活魔法を攻撃魔法のように使えることや様々な金儲けのタネなど、この世界の人に知られればいろいろ面倒なことが多い。

こうしたことを考えると新メンバーは奴隷のほうがいい。奴隷と結ぶ魔導契約では主が従者（あるじ）に口止めを強要することができ、情報が漏れてしまう危険性を拭い去ることができるからだ。

それに奴隷ならやはり女がいいだろう。男なんて見ていて楽しくない。

「いや、女で騎士か剣士だな。そのほうが楽しいし。っていうか他の男にアネツテにちよっかい出されたりしたら困るからな」

「またマスターのエッチの犠牲者が増えるんですね」

そう言ってジト目で睨（にら）むアネツテ。

「そういうことだな、フフッ」

「そこは否定してくださいっ」

顔を赤らめて、すかさずツツコミを入れるアネツテに、リキオーは不敵な笑みを返す。

そこへハヤテが走ってきた。すかさずリキオーは彼を捕まえて抱きかかえる。

リキオーがハヤテのもふもふとした毛を撫でまわすと、ハヤテは「はふはふ」と気持ちよさそうに息を吐き出して体を弛（しな）緩（かん）させた。

そんな仔狼（こおおかみ）を横目に、リキオーはぼんやりと部屋の中を見回す。

（この村は居心地がいい反面、王都から遠く、物流が致命的に悪いんだよな）

リキオーは面倒くさがり屋で引き籠もりがちな傾向がある一方、飽きっぽい性格でもあった。
(生活の拠点を、王都にも便がいいイストバル辺りにでも移すかな)

しかしながら、リキオーが引越しを考えるに至ったのは、物流の悪さだけが理由ではない。

ハヤテの体が、犬で言えば成犬ほどの大きさまで成長しており、家が手狭に感じるようになってきた。

また、そもそも今の家は商家のボンボンの隠れ家として建てられたもので、スペース的にも広く造られているわけではない。そんな窮屈さも現代日本の自分の部屋みたいで好きだったのだが。

そんなことを考えながら、アネッテに声をかける。

彼女は、リキオーがハヤテをもふもふして遊んでいる間に、洗濯をしに部屋の奥へと引っ込んでいた。

「そういえば、アネッテ、ちょっと相談があるんだけどさ」

「はい、なんですか」

洗濯の手を休めてメインフロアへと歩いてくるアネッテ。

ちなみに洗濯は、昔懐かしいタライで手揉みするという方法がとられていた。アネッテも以前は冷たい水で洗っていたのだが、リキオーが風呂を考案したお陰で、温かい残り湯を利用することができるようになった。

それでも屈んでゴシゴシするのは腰に来るだろう。そう心配したリキオーはアネッテのために簡

単な洗濯機を造ってあげた。

大きなボックスのなかに石鹼水せっけんすいを入れて、備え付けのペダルを踏むとなかの水がぐるぐる回るという簡単なつくりであったが、それでもアネッテには感激された。

さすがにここまで簡単なつくりでは売れるとは思えない。しかし、ポンプや風呂など現代日本では当たり前のものを造っただけで大ブームになってしまう世界である。

もしかしたらこの簡易の洗濯機もブームになる可能性はあるかもしれない。

それはさておき、彼のもとまでやってきたアネッテに尋ねる。

「じつは生活の拠点を移そうと思うんだ。これはまだ思いついただけなんだが。どう思う？」

「私はマスターが行くところにどこでも付いていきますよ。マスターは冒険者だし、一つのところに縛られる必要はないんじゃないでしょうか」

「じゃ、そうしか」

「どこに住むかは決めてあるんですか？」

「今の時点ではイストバルかな。フェル湖のある」

「ああ！ あのきれいな湖のところですね」

イストバルは、商業ギルドの招待で行った王都からユシュト村に里帰りしたときに通りかかった。そのためアネッテももちろん知っていた。

しかしイストバルまで行くとなると面倒なことがある。

冒険者は、財布が許すかぎりどこへ行くのも基本的に自由だが、関所を通るには「鑑札」という、地方領主やギルドから認められていることを示す通行許可証が必要となる。そして、この鑑札を得るための手続きが煩わしい。

しかし関所を通るには裏ワザがある。冒険者ギルドで関所の先にある場所で発生したクエストを受注すれば簡単に通してもらえるのだ。

というわけで、リキオーは冒険者ギルドへ向かうことにした。

ついでに商業ギルドへ行き、紙漉きで作った紙を見せてもいいかもしれない。じつは試作としていろいろ色を付けてみたものもあるのだ。こんなものでも、大量生産できれば身近で使える紙が増えて便利だろう。

「冒険者ギルドに行ってくるよ」

「はい、行つてらっしゃい、マスター」

アネットに声をかけて、リキオーは家を出た。

通りを進んで広場に出る。

広場には銭湯があり、風呂の客目当ての商売人たちによってちよつとした市が立っていた。そういう雑多な雰囲気が好きだとリキオーは思った。

冒険者ギルドに到着し、観音開きになっているドアを開ける。

受付カウンターには午後担当の受付嬢リティナがいた。彼女はリキオーの顔を見つけると色つぽ

いウィンクをしてくる。

「はあい、リキオーくん、なにか探しものかしら」

「王都方面に行く討伐行はないですか。あとじつは、討伐に行くついでに引越そうかと思っていますんですよ」

「やあん、残念だわ。でも仕方がないわね。こちらへん田舎だもんねえ」

リティナはわかるわかるといったふうに頷く。

「それにランクCともなるとこの辺りの獲物じゃ物足りなくなるものね。やっぱり一旗揚げするには王都よねえ」

「のんびりした雰囲気は好きだったんですけど、いかんせん買物物がね……。装備とか揃えようにも物がないし……」

「それでどこに行こうと思ってるの？」

「イストバルにしようかと思っています。村の名前に『バル』が付いているので都会でしょうし、王都にも近いですしね」

「バル」は、「祝福された土地」という意味の接尾語である。地名に「バル」の付く地域は領主によって管理されており、他の村より格段に栄えた地方都市となっている。

「いいわよねえ、フェル湖でしょう。湖畔に建つ家なんて素敵よね」

ああ、そうか！ とリキオーのテンションが上がった。利便性のことは考えていたが、そう

いう向きも期待できると気づかされたのだ。

「ん〜と、そうなるとかかしら」

リティナがカウンタ―から出て、ミニスカートから覗く大胆な美脚をくねらせる。そうして色気を振りまきながら掲示板から紹介書を取り上げた。カウンタ―に掴まってそれをリキオーに差し出す。

チューブトップに包まれた大きなバストがユサユサと弾んでいる。髪を掻きあげて微笑む仕草がとても艶つぽく、すべすべの腋の下もきれいだ。傍に立つリキオーはむっちりとした太ももを堪能した。

ギルド一階のカフェテリアに集う客たちも、その色香に引き寄せられてフリーズしている。

（ああ、たまらないなあ）

渡された紹介書に目を落としながらも、ついつい横目でリティナの素晴らしい美脚とボリウムのある胸元をチラ見してしまう。

こればかりは逆らえない。男の性というやつだ。

煩惱に振り回されながらも、探していた条件に見合うクエストを発見する。

「お、これいいですね。募集がドルトン村ならイストバルの隣村だし」

案件は、近郊の森に出るホブゴブリンの討伐と調査。要求ランクはCなので、移動ついでに、アネッテやハヤテのレベル上げもできそうだ。

リティナにクエストを受注する旨を告げると、彼女は手早く手続きを進めてくれた。

「はい、決まりね。ウフツ、ランクCとしては初めての仕事になるわ。リキオーくんのことだから問題ないと思うけどよろしくね」

「わかりました。出発するときまた挨拶に来ますね」

ギルドの色つぽいおねーさんともお別れかと思い、ちよつぷり寂しくなるリキオーであった。このクエストのほかに道中にこなせそうな軽めのクエストをいくつか受注すると、冒険者ギルドを出て商業ギルドへ向かった。

建物の入り口で、ちよつぷり出かけようとしていた商業ギルド支店長、ラースに出くわした。ラースがリキオーに気づいて声をかけてくる。

「おや、リキオー様。今日はどうかありませんでしたか」

「うん、じつは引越そうかと思っててね、その報告。と、紙について話をしようと思って来ました」紙についてと聞いて突然ラースは目の色を変える。

「おお、これは一大事ですな。少々お待ちを。これエーリカ。この荷物を領主様のところへお届けしておくれ。私はこちらのお客様のお相手をせねばなんのぞな」

「はいにゃ」

エーリカと呼ばれていたのは猫人族の女の子である。彼女はラースから荷物を受け取ると、目を細めてリキオーにぺこりと頭を下げた。そして、先っぽだけが白いしっぽをくねらせながら出て行つ

た。

すぐにラースはリキオーを室内へと案内する。

「さて、失礼しました。こちらへどうぞ」

通された応接セットにリキオーが腰をかけるとラースは口早に切り出した。

「先ほどお引越しなさるとおっしゃっていましたが、転居先はすでに決まっておりますか？」

「イストバルを考えています」

「おお。あそこは眺めが素晴らしいですから。わかりました。こちらからも鑑札を出しておきましょう。また向こうの支部にも連絡しておきますので、何かありましたらそちらへよろしく願います。それと……紙でしたな」

「はい、こんな感じです」

さっそくリキオーはサンプルとして用意しておいた色付きの紙を取り出した。キレイに裁断してあるものとわざと手作り感を残したもの。そして手近な材料で漂白したものまである。

ラースが目を見開き、感嘆の声を上げる。

「おお、これは実用に耐えられそうな出来ですね。色の差も面白い」

「色は材料の違いですね。元々、手間のかかるようなものでもないのですよ。そのあたりはこちらの資料にまとめてありますので」

そう言ってリキオーは紙の束をラースに手渡す。その資料も彼が紙漉きで作った紙でできている。

「材料さえあれば簡単にできますから、家庭でも作れます。また、紙は物書きの足しにできるだけでなく、教会で勉強をしているお子さんなどにも役立つと思います」

教会では子どもたちを集めて学校を運営していたが、紙不足は深刻な問題であった。もし安く大量の紙が提供されるようになれば、その状況も変わるだろう。

また紙漉きを上手く運用できれば、新たな産業を生み出すこともできるかもしれない。例えばポンプを造るといったことは高い技術が要求されるため熟練した職人にしかできないが、紙漉きならばコツさえつかめば誰でもできる。もし仕事がなくあふれている者がいれば、そうした者たちにとって現金収入の手段の一つにもなるかもしれない。

「それはいい考えですね。フフ、リキオー様は、我ら残る者にさえこうした福音を授けてくださる。ありがたいことです」

それからリキオーは、ラースと家の明け渡しなどについての手続きを済ませ、商業者ギルドをあとにするのだった。

商業ギルドからの帰り道。リキオーが村の景色を眺めながら歩いていると、ものものしい雰囲気。の漂う人だかりに出くわした。どうやら喧騒の中心にあるパーティがいるらしい。

リキオーは群衆のなかにまぎれ込むと、その中心を眺めてみた。

いかにも高そうな防具を身につけた男を先頭に、ただならぬオーラをまとったパーティが歩を進

めると、そのたびごとに人の波がザアッと分かれていく。

そのように派手な装いをする者たちといえばトップランカーの冒険者に違いない。

ランクSの冒険者ともなれば有名な者である。宿屋の料金は依頼者持ちでタダ、地方領主からは夜の晩餐会ばんさんかいに招かれる、そんな特権階級と言える存在だ。

パーティ構成は、剣士、双剣士、重戦士、法術士、賢者。それぞれが装備している武器や防具のグレードの高さは、武具に精通していない者にさえ容易にわかるほどであった。

「……ムッ？」

先頭を歩いていた派手な黒と朱の文様入りの鎧を身につけた剣士が一瞬視線を向けた。

その方向にいたのはリキオーである。

「こらッ、アル！ 素人さんを怖がらせちゃダメっ！ 聞いてるの？」

彼の背後にいた女性法術士が咎める。彼が群衆を睨んだと思つたようだ。しかし、同じパーティメンバーである賢者は、剣士が関心かんしんを向けた先に何かを感じ取っていた。

「今の男……アルブレヒトが注意を向けるとは何かあるのだろうか。念のため探りを入れておきましようか……」

彼の名はタルコットと言う。彼は、群衆のなかにひそませておいたスパイに向けて目配せをする
と、リーダーたちの後を追いかけていった。

ユシュトにある一番高い宿。

ここは今、ある有名なパーティが定宿にしていることで知られていた。

そこにやってきたのはひとりの男。

彼が、カウンターでグラスを磨いていたマスターに何か話かけると、マスターは頷き、階段の上のほうを示して顎あごでしやくった。

男は階段を上り、何かの符牒ふだうを示すように一定のリズムをとって静かにドアを叩いた。

そうしながら彼は部屋に入ることなく、ドアの下から手紙を滑りこませる。

部屋のなかにはタルコットがいた。手にした手紙を見ると指示を書き込んでドアの下から返す。

それを受け取った男は返事も見ずに宿を出て行った。

「はてさて。この時期なら……」

タルコットは、各地の有力者の動向を把握していた。

毎年この時期にイストバル領主の娘が、叔母の家を見舞いに出るという情報を掴んでいたし、領主の継母がその娘を疎んうとじていることも……。

しばらく彼は難しい顔をしていたが、何かを閃ひらめいたように悪い顔をして口元に笑みを浮かべた。そうして部屋の奥でじつと佇たずんだままの男に話しかける。

「アルブレヒト。どうやら面白いことが起こりそうですよ」

アルブレヒトは彼を見向きもせず、背にした大剣の柄を握りしめていた。

話は少し遡る。さかのぼ

ランクSの冒険者パーティ「ガラム武闘団」は王都にいた。

ランクSともなると冒険者ギルドからの依頼では動かない。彼らを動かすのは、近衛情報部からの依頼、もしくは王室からの直接要請である。

ガラム武闘団の賢者タルコットは近衛からの呼び出しで、パーティを離れて王室に縁のある貴族の館にいた。

彼が招かれた部屋は塗り固められた壁で覆われており、誰も聞き耳を立てたりできない造りになっている。

そこには、タルコットのほかに前髪を垂らした甘いマスクの男がいた。近衛の団長付き士官である。その男が、前髪を掻き上げながらタルコットに話しはじめる。

「タルコットさん、今回の依頼ですが、ある人物を監視して、できることならその実力を確かめて欲しいというものなんです」

「ほう？ 近衛が動くとなれば、それ相当の人物なのでしょうな」

「いえ、単なる冒険者ですよ」

タルコットはピクツと眉を顰めた。ひそ

目の前の人物は、自分がガラム武闘団の交渉役と知っているはずだ。そして自分たちのリーダーが食指を動かすような相手でないとならぬ。ガラム武闘団が動かないことも知っているはず。単なる冒険者の調査であれば冒険者ギルドで事足りるはずなのだが……。

タルコットがそう思案していると、男は表情を変えずに淡々と言い放つ。

「私からはこれ以上の情報はありません。でもあなた方のリーダーがその冒険者のことを知れば食いついてくるでしょう。それは保証しますよ」

そんな謎の言葉を残して男は去っていった。

そして、それはもうしばらくして現実のものとなる。

2 騒動に巻き込まれる

ユシウトの屋敷を引き払ったあと、リキオーたちはあらかじめ冒険者ギルドで受注していた魔物退治のクエストを消化しつつ、イストバル方面へと進んでいた。

馬車でウエスバル、サバラという途中の村を経由して進み、ドルトンというイストバル直前の村で一夜を過ごしたあと、ここからは歩きでイストバルへ向かうことになった。

急いでいないのでクエストを精力的に消化していく。ハヤテは地面を駆けるのが楽しいらしく、リキオーたちの先を走っていた。

「ハヤテさあ、ダッシュのスキルあるんだよね」

「そうなんですか。すごく速そうですね」

他愛のない話をアネットとしながら歩いていく。とくに内容のない話だったが、それでも彼女はリキオーの言葉に熱心に相槌を打っていた。

「ハヤテはどれだけ大きくなるんだろうね。アネットを乗せられるくらいになったら楽しそうなんだけど」

「そうになったらいいですね」

「今度住むことになっているイストバルの家は結構広いみたいなんだ。ハヤテも伸び伸びできるといいな」

ちなみに徒歩で移動していると野盗に出会う確率がぐんと上がる。街道筋といっても人気のない森のなかにいくらでも潜むことはできるので。そのため、のんびりと歩いていてもリキオーは最低限の警戒は怠っていないかった。

彼らが歩いている街道筋は、舗装がされているわけではない。ただ獣道より上等という程度の田舎道だ。結構アップダウンもあるので、馬車で通ると尻が痛くなりそうな道である。

先ほどからリキオーはとりとめのない話を続けている。

「そういえばさ、インベントリって使ってる？」

「使ってませんね。見えないものを触る感じが慣れなくて」

アネットと話しながら歩いてきたが、そろそろ会話のネタも尽きてきた頃合いだ。そもそも丸一日歩いているのである。まあ、途中で野宿してもいいと思っているが。

「歩き疲れたら言ってみてね」

「大丈夫です。エルフは森のあるところでは元気なんですよ」

改めてアネットを見てみると、言葉に違わず本当に元気そうだ。リキオーには元から体力増幅効果がかかっているので歩き続けても疲れない。ハヤテに至っては疲れるどころか楽しそうだ。

「この辺りにも、精霊樹ってあるの？」

アネットの元気の秘訣は、精霊樹のおかげではないかと思ったので尋ねてみた。

ウェスバル西方に広がる大森林「隠れじの森」にはエルフの里があり、その中央には巨大な精霊樹がある。

エルフは卵から孵るまでの間、精霊樹の懷に抱かれて育つ。精霊樹の魔力を与えられて育つため、エルフの男性は精霊樹の「護り手」に、女性は精霊樹に仕える「癒し手」になるのである。

「ありませんね。でもエルフは森の眷属ですから恩恵を受けられます」
なるほど、そういうものなのか。

たまにはのんびり歩くのもいいなと思っていたが、こういうときにかぎってトラブルが起こるも

のだ。

気づけば、リキオーたちの先を走っていたハヤテが止まっている。不思議に思っリキオーが近寄ると、そこには立派な馬車が停まっていた。

突然、茂みの奥から女性の叫び声上がる。

リキオーは、アネッテとハヤテに真剣な眼差しを向けた。

「アネッテ、ハヤテと一緒に行動。行くよ」

「はい」

「わうっ」

リキオーが抜刀しながら走り始めると、アネッテもハヤテと彼のあとを追って駆け出した。走りながら馬車のなかを確かめる。メイドと思われる女性が斬られ、無残な傷跡をさらして倒れていた。もう息はなさそうだ。

馬車の御者の姿はなく、すでに逃げ出したらしい。馬は殺されていた。

血の臭いを追って森の奥に入っていくと、もう一人のメイドが倒れている。

こちらも斬りつけられていたが、幸いにしてまだ息はあるようだ。

「アネッテ、この人を頼む」

「はいっ」

アネッテが癒しの呪文を唱える。その間に周囲を警戒するハヤテ。

リキオーはさらに走りながら奥に分け入って行く。

そこにいたのは、見るからに野蠻そうな二人の野盗である。その間には大きな木を背にして、少女が蒼白の表情でハアハアと息を荒らげている。

野盗の二人は少女に気を取られて、リキオーが来たことに気づいていない。さっそくリキオーはそのうちの一人を後ろから急襲し、容赦なく突き刺した。

「ぐわっ！ な、てめえ……ぐっ」

声を上げて倒れる野盗。リキオーが刀を引き抜くと、血飛沫がブシュツと音を立てて噴き出した。それを見たもう一人の男が、リキオーに向け短刀を突き出してくるが、リキオーはその攻撃をあつさりとはね上げ、男のから空きの胸を狙って返す刀で振り抜いた。

男は無言のまま血と内臓を腹からこぼしながら二、三步進むと、そのまま地に倒れ伏す。

リキオーは刀を収めて少女を振り返る。

少女は、目を丸くしたまま彼を凝視していたが、危機を脱したことを理解すると虚脱したように倒れてしまった。

リキオーが近寄って倒れた少女を抱き起こし、「もう大丈夫だ」と囁くと、彼女はかろうじて保っていた意識で「ああ……」と返事する。しかし、そうつぶやくや否や彼の腕のなかでグツタリとしてしまった。

負傷していないか確かめ、大丈夫だとわかると、リキオーは彼女を抱き上げてアネッテのところ

へ戻った。さっそくアネツテに声をかける。

「どう？ そっちは」

リキオーが尋ねたのは、アネツテに手当をお願いしていたメイドの容態である。

「はい、なんとか息はしています。マスター、そのお嬢さんは」

「野盗たちに襲われかけていた少女だ。目立った傷はなさそうだが、一応ヒールをかけといてくれるかな」

「はい」

アネツテが【ショートヒール】を唱える。少女の体を青い光が包むと、その顔に穏やかな表情が浮かんだ。とはいえ気を失ったままだが。

治療を終えたアネツテが心配そうな表情を浮かべて尋ねる。

「いったい、何があったんでしょうね」

「うん、まあ一番可能性があるのは物盗りかなあ。しかし馬車を襲うなんて……護衛を連れていなかったから狙われたのかな。このお嬢さんはメイドさんを二人も連れていたみたいだから、もしかしたらどっかのお屋敷のお姫さんかもしれないね」

意識を失ったままの二人を馬車の座席に横たわらせ、どうしたものかと思案していると、遠くからパカラッパカラッと馬を走らせる音が聞こえてくる。しばらくすると、馬に乗った複数の騎士が現れた。

「そのお前、その馬車がイストバル領主エグモント様のものと知った上での狼藉か！」
居丈高に声を上げる騎士。

きれいに手入れされた馬にまたがり、その鎧は銀色に輝いている。

さらに、あとに続いて騎士の仲間たちが現れた。彼らが馬車に近づいてくるので、リキオーはハヤテとアネツテを下がらせる。

騎士たちに向けて、リキオーが大声で叫ぶ。

「俺たちは冒険者パーティ、銀狼団だ。イストバルに向かう途中、この馬車が野盗に襲われていたところにたまたま通りがかった。その森の奥に俺が倒した野盗たちをそのまま放置してある。もし疑いとお思いなら、実際にその目で確かめてみるがいい」

それを聞いた騎士の仲間たちは、疑わしそうな目をして森に入ってしまった。しかし、リキオーと相対している騎士は疑いを解いた様子はない。剣の柄に手をかけるや否や……。

「フツ、傭兵崩れの野盗の言い分など聞く耳持たぬわ」

鞘走る音を立てて剣を抜き放ち、剣先をリキオーたちに向けた。

一気に緊張感が走る。

ハヤテは全身の毛を立てて臨戦態勢になり、アネツテはいつでも呪文を唱えられるように両手で杖を構える。

そこへ、少年騎士が駆け寄って跪いた。

「ヘルムート様ッ、お待ちください！ その者の言う通り、森のなかに野盗の死骸しがいがありました。ヘレナお嬢様は眠っておられるようですが、ご無事です。さらにお嬢様とメイドのオリアナには丁寧に手当てされた形跡がございました」

ヘルムートと呼ばれた騎士は一瞬つまらなそうな顔をしながらも、キツと表情を引き締め、少年騎士に向かって言い放つ。

「むっ、そうか……。ギウンター、あとは任せた。私は領主様にヘレナ様の無事をいち早くお伝えしてくる」

「はっ」

ヘルムートは剣を収め、リキオーを睨んだまま再び馬を走らせていった。

ヘルムートの後ろ姿が見えなくなると、少年騎士はリキオーたちに向き直り、近づいて頭を下げた。「私どもの団長が失礼な態度を取ってしまい申し訳ありません。私は守護騎士団に所属するギウンターと申します。このたびはお嬢様とメイドをお助けいただきありがとうございます」

そう言って感謝の気持ちを伝えるギウンター。リキオーはすでに死んでいたメイドのことを思い出し、すまなそうな顔をして返答する。

「いや、メイドのもう一人のほうは残念だった。俺たちが来たときには、もう息を引き取っていたんでね」

別の少年騎士たちは、連れてきた馬を馬車に繋つなげていた。どうやらそのまま引つ張っていくらし

い。息を引き取ったもう一人のメイドの遺体も丁寧に馬車に乗せている。

そんな様子に目をやりながら、ギウンターが口を開く。

「彼女は残念でしたが、お嬢様が無事だったのは何よりの幸いでございました。私どもはこのまま馬車を引いてイストバルに戻ります。あらためてお礼などさせていただきます。重ねて申し上げますが、団長の無礼をどうかお許しください」

「ああ、わかった。こちらはずつくりと歩いてイストバルに向かう。もし、俺たちに用があるときはイストバルの冒険者ギルドに声をかけといてくれ」

「わかりました。それでは失礼いたします」

ギウンターは終始丁寧な口調と態度で、リキオーたちに接していた。そして深々と礼をすると、馬車を走らせてその場を去っていった。

3 新居にて

「あわただしく行っちゃいましたね」

アネッテが急に脱力したように声を漏らした。

「ああ、でもなんとか助かってよかったな」

「はい」

そう返事をしながらアネッテは嬉しそうにしている。自分の魔法で人を救えたことにちよつと興奮しているらしい。アネッテにとってそれは純粹な喜びと言えた。

移動を再開してしばらくすると、大きな壁に囲まれた都市イストバルが見えてきた。同じ壁でも、ユシュト村のそれと比べると規模が違う。ユシュトでは、簡易な結界の上に適当な木の柱を立てた壁であつたが、こちらは堅牢な石造りの壁となつてゐる。

衛兵のいる門に冒険者の腕輪を示してなかに入れてもらう。その際、パーティ単位で銀貨五枚を要求されたが、あとで返してくれるらしい。

門を抜けるとすぐ目の前には広場があり、大きな厩舎きゅうしゃがあつた。そこからたくさん馬のいななきが聞こえてくる。

街を歩いていると視線を感じた。狼のハヤテを連れている上に、エルフがいるのだから目立つて当然だろう。

ともかく商業ギルドを目指すことにした。ユシュト村に比べると道幅も広く歩きやすい。

やがてたどり着いた商業ギルドの建物は、ユシュトのそれと比べると約三倍の大きさはあつた。ウェスタン風の出入口は同じだが、受付カウンターが五つもある。

どの受付に行ったらよいかわからないので、多くの人が並んでる列の後ろに立つ。アネッテたちは空いてる椅子に座らせておいた。

順番がくる。カウンターのなかには、日本の着物のような衣装をまとつた美しい女性が座っていた。

「はい、次の方。どんなご用でしょう」

「支部長に取り次いで欲しいんだが。俺はユシュトから来た冒険者のリキオーだ」

リキオーが支部長と言つたので、急にあわて出す受付嬢。

「え、はつ、はい。あの、今、案内の者を付けますので、そちらの長椅子でお待ちいただけますか」
「わかつた。ありがとう」

リキオーがアネッテたちの待つてゐるところへ戻つてくると、ちよつとした人ばかりができていた。アネッテは少女たちに囲まれており、ハヤテは小さな子どもたちにもふもふされていたからである。

アネッテとハヤテを連れて長椅子へと移動すると、すでに案内の女性が来ていた。

イストバルの商業ギルドの女性の衣装は、下は短めのスカートになつてゐるらしい。スカートのサイドにはスリットが入つてゐるが、切り込みが浅いのでパンチラは期待できそうにない。ちなみに足元はブーツである。

「ようこそ、イストバル商業ギルドへ。リキオー様とお連れの方、どうぞこちらへ。私は受付と案内をしております、トーヴェと申します」

「俺はリキオーです。こつちアネッテとハヤテ。この狼も一緒にいい？」

「はい、ハヤテ様も一緒にどうぞ」

「わう」

支部長の部屋まで案内してくれるというトーヴェに付いていくリキオーたち。二階の奥に六つある扉の一つを開け、なかに入った。

そこにはコの字型の机があり、フード付きのローブを着た丸顔の野暮^{やぼ}つたい雰囲気^{きふく}の男がいた。しかし目つきは鋭い。

「どうぞ入ってください。支部長、あとをお願いします」

「ああ、お疲れ、トーヴェ。どうぞリキオー様、お座りください。私、このイストバル商業ギルドで支部長をしておりますスチエパーンと申します」

トーヴェが去ってしまうと、リキオーたちは窓際のスチエパーンと対面する位置の椅子に座った。「リキオーです。ユシュトではラーズさんにお世話になりました。こちらはアネッテ、そしてハヤテ。銀狼団のパーティメンバーです」

「これは、ご丁寧ありがとうございます。ラーズ殿からお話は伺っています。リキオー様のお屋敷はフェル湖の湖畔にございます。今、案内を呼びますので、お屋敷のことでご用がある場合にはその者にお申し付けください」

「わざわざ、ありがとうございます」

「いえいえ、ラーズ殿からもよく言われておりますので。リキオー様には便宜を図るようにと。少々お待ちください」

スチエパーンは机の上に乗っていた銀色の鈴を鳴らした。チリーンと涼し気な音が響くと、ノックの音がしてローブ姿の男の人が入ってきた。

「リキオー様、こちらはうちの支部のライナーです。ライナー、リキオー様のお屋敷の案内を頼むよ」

「わかりました。すぐ向かいますか？」

「はい、お願いします」

「それでは、また何かございましたらおいでください。そのときは並ばずに、階段に近い窓口に声をおかけください」

リキオーたちはライナーに付いて商業ギルドを出た。

「少し歩きますがよろしいでしょうか。お疲れではないですか」

「平気です。冒険者は体が資本ですしね。しかし、イストバルは大きい村です」

「ええ、やはり領主様のお力が大きいかと。村の発展のためにいろいろな施策を行っておられます。おかげで私も忙しくさせていただいているわけですが」

商業ギルドを出るとメインストリートを下り、広場まで出た。そして住宅街に向けて歩き出す。

「私たちの家になる場所ですけど、お風呂ってまだないんですよね？」

「申し訳ありません。リキオー様のお考えになった風呂ですが、今のところ大きなお屋敷から造っているところでして、まだ間に合っておりません」

「ああ、いいですよ。今度の家は広いというので敷地を見せてもらってから、大工さんと話します」

「はい、大工はこちらから手配しておきますので。この通りを過ぎると住宅街の通りになります。リキオー様のお屋敷はこの通りの奥のほうになります」

イストバルの通りはきれいに整備されていた。大きな通りの両サイドには植樹^{しゅく}さえされている。この世界の一般的な家は石造りが基本だ。ブロックを積み上げ、壁には漆喰^{しき}を塗って仕上げている。だから村全体が白っぽく見える。

村の中央の家には塀^ひなどないが、奥に行くに従って塀に囲まれた大きな家が増えてくる。

「あ、見えてきましたね。あそこの道を奥に入っているところです」

「あれですか……塀が高い」

「はい、前に住んでいた方がさる商家^{おだな}の奥様で、隠れ家的な使い方をしていたらしいと伺っております」

「ほう。まあ、秘密でなにかやるには向いてるかな」

他の家に比べてみても明らかに塀が高く、なかを見せない造りになっている。壁が開けているのは湖の方だけだ。敷地のなかを覗き込むなら、湖に船を浮かべないと無理だろう。

しかし、この世界の湖には水棲モンスターがいるから、船に乘ろうとすれば食われるだけかもしれない。そんなことを考えていたら、家の入り口に到着した。

ライナーが鍵をリキオーに手渡しながら告げる。

「着きましたね、リキオー様、こちら結界解除の鍵になります。なかを見ていきましょう」

「ええ、屋内を見ながら、ついでに家具の注文とかもしていいですかね」

「はい、なんなりとお申し付けください」

リキオーの提案にライナーは柔らかな物腰で頷いた。

家の敷地のなかに入ると、ハヤテは嬉しそうに吠えながら走り始める。庭を目にしたリキオーとアネットは感嘆の声を上げた。

「おおお、広いね」

「広いですね」

アネットもハヤテのようにワクワクを隠し切れないらしい。玄関からリビングに続く通路を歩きながら、その途中にある厨房などを楽しそうに見ている。

玄関だけで前の家のメインフロアぐらいありそうだ。

広いリビングとそこに直結したダイニングからは、湖の素晴らしい眺望が楽しめる。湖に面したウッドデッキの先には船着場があるらしい。

リキオーがライナーに尋ねる。

「あれ、湖からモンスターは上がってこないの？」

「フェル湖にはブルードラゴン様がいらっしゃいますから、水系のモンスターは皆、おとなしいでございますよ」

「ほえ、ここ竜がいたのか。一度ご挨拶に伺わないとな」

「水竜神殿へは広場から乗合馬車が出ておりますので、そちらをご利用ください」
ちなみに、この世界には超上位種として真竜種が存在している。

確認されているのはブルー、レッド、グリーン、ブラック、ゴールドの五種。二種はこのモンド大陸におり、このフェル湖にいるブルードラゴンはそのうちのひとつだ。対話が可能で気性の優しいドラゴンとして崇め奉られている。

仮に、真竜種を倒そうとした場合、巨体な上にめっぽう強いので、カスタしたフルレイドパーティでも討伐できるか怪しい。

すべての部屋をひと通り見終えると、リキオーは広いベッド、寝具、机、ソファセットなどなど、結構な量の家具をライナーにお願いすることになった。

リキオーの注文を受けて、ライナーはホクホク顔でお辞儀をして去っていった。

ハヤテは棧橋の先端で湖を眺めている。散々走り回って、もう新しい屋敷を探検し尽くしてしまっ
たらしい。

ウッドデッキでは、アネッテが直立したまま湖のほうを見つめていた。

その隣に並んで立つリキオー。彼女のしている風景と一緒に眺めながら、彼女を抱き寄せる。

アネッテがそっとつぶやく。

「マスター、私、幸せです」

「ああ、俺もだよ」

リキオーがそう答えると、アネッテは彼に全身を預けた。敬愛する主人と共に過ごす幸福を噛み締めるアネッテであった。

4 濡れ衣ぎぬ

一応、新居は用意できたが、まだ寝具等そろっていないので、リキオーたちは村の宿に宿泊することにした。泊まる部屋は奮発してスイートルームである。

同じ宿屋の貴賓室には、ランクSパーティ、ガラム武闘団がいた。鎧を脱ぎ、ラフな格好でそれぞれくつろいでいる。

「獲物を見つけたんですね？」

賢者のタルコットが、ふんぞり返って天井をぼんやりと見ているガラム武闘団のリーダー、剣士のアルブレヒトに問いかけた。

アルブレヒトは賢者のほうを見ない。彼は通りですれ違っただけのリキオーがただ者ではないことを見抜いたらしい。餌を前にした狼のように獐獍どうもうそうな笑みを浮かべていた。

一方その頃、同じ宿のスイートルームでは、リキオーがアネッテに後ろから抱きついてスキンシップを楽しんでいた。

アネッテはポウツと頬を火照らせて彼に身を任せている。

「アネッテ。可愛いよ」

「マスター……」

リキオーからそう言われて、アネッテは顔を赤らめてしまう。リキオーが唇を寄せて接吻すると、ハアと熱いため息を漏らした。そうしてウツトリと彼の腕に包まれている。

ハヤテは我関せずといった感じで、フワアとあくびをしてはゴロゴロしていた。

翌日、宿屋の部屋を引き払い、新居に移動する。

どうやら昨日注文しておいた家具はすでに運び込まれているらしい。それを確認すると、リキオーたちは食品の買い物ついでに、鍛冶屋と大工の職人たちの挨拶回りをすることにした。

ちなみに、新居に新たに造ろうとしている風呂は、ウッドデッキを改造した露天風呂にするつもりだ。新居は周りを高い塀で囲まれているが、湖方面は開けているので開放感もバッチリなのだ。とはいえ、本格的な風呂を造るのには日数がかかるので、当座は庭に土魔法で穴を空けて簡易の風呂で済ますことになっている。

なお、屋敷の一部を改造することは、すでに商業ギルドに許可を取ってある。ユシュト村で最初

の屋敷を借りたときに、勝手に厩舎を改造して怒られてしまったのは今となってはいい思い出だ。

さっそく市場にやってきたリキオーたち。

ユシュトのゴチャゴチャとした市場とは違い、整然としていて商品も豊富だ。この世界では手に入らないと諦めかけていた珍しい調味料まで手に入れることができた。

とくに嬉しかったのは、魚から作る魚醬ぎょじょうがあったこと。大豆から作る醬油しょうゆではなかったのだが、それに近い味なので、日本人として懐かしい気分になった。

アネッテは魚醬を見ることがなかったらしく、困惑顔で尋ねてきた。

「マスター、これってどう使えますか」

「味付けをする調味料さ。それに肉を焼くときに下味としてこれに漬け込んでおくと、肉が硬くならないんだよ。今度試してみよう」

「はい」

初めて見る調味料に興味津々のアネッテは、それらを眺めながら楽しそうにしている。

ちなみに商業ギルドを通すと、ここで購入したものは配達もしてくれるという。なんとも嬉しいサービスだ。

市場の次は、大工たちの集まる作業場を訪れた。

木の香りがほのかに漂い、下働きが大勢いて活気がある。

リキオーは訪い^{おとづ}れを告げて、さっそく彼の家の風呂について相談を持ちかけた。リキオーが風呂の考案者だということを明かしたところ、優先して仕事をしてくれることになった。

次いで訪れた鍛冶場では、新しモノ好きの若者を紹介してもらった。

それというのも、リキオーはこの世界の馬車の乗り心地を彼らと本格的に何とかしたいと思っていたので、路面からの衝撃や振動が伝わるのを防ぐサスペンションの改良を彼らと進めることにしたのだ。

最後に、冒険者ギルドに立ち寄る。

リキオーは、道中で助けた女の子が領主の娘だったことを思い出していた。

そういえば、ギウンターと呼ばれていた少年の騎士に、もし何かあればギルドに言付け^{ことづ}けるように言っておいたが。

ギルドのカウンターは、その目の前まで酒場の席が広がっていた。窓口はさすが大都市とあって七つもある。受付には女性だけでなく男性も半分くらいいる。

しかしどういうわけか、空いているのに誰も受付に近寄ろうとしない。真ん中の窓口の若い金髪の男が紙束と格闘しているばかりである。

リキオーは何も考えずにその金髪の男に声をかけた。男の服装はタイをしないラフなシャツ姿

だった。冒険者とは違う洒落た恰好^{かっこう}だ。

「いらつしやい、イストバル冒険者ギルドにようこそ。今日はどういった用件だい？」

男は紙束との格闘から顔を上げて商売人の顔を見せると、決まり文句の口上を述べる。

リキオーはもしかしたらと思い、ギウンターから伝言を預かっていないか聞いてみた。

「俺たちはユシュトからやってきたパーティで銀狼団という。なにか俺たちに指名で呼び出しがかかってないかと思ってな」

金髪の男は、リキオーが差し出した腕輪を水晶にかざしてランクを確認する。

「おう、銀狼団はランクCパーティか」

そして奥を振り返って合図を送ると、リキオーに告げる。

「悪いが、拘束^{こうそく}させてもらうぞ。お前たちには領主令嬢を襲い、強盗を働いたという容疑がかかけられている」

すると、黒い鎧に身を包んだ集団がホールへとなだれ込んできた。

ギルドに緊張が走った。

黒い鎧の集団は、すでにリキオーとアネッテを取り囲んでいる。

ギルドの入り口でお座りしていたハヤテも、刺股^{さすまた}に似た道具を持った黒い鎧の団に囲まれていた。

アネッテが気色ばんでリキオーを振り返る。

「マスター！」

「手を出すなよ。ハヤテも。いいな！ 大人しくしてるんだ」

リキオーは冷静に佇んでいた。

ハヤテもリキオーが出した指示に従って、ペタンと地面に伏せている。

「フツ、賢明な判断だ。抵抗するなよ」

金髪の男が忠告する。

「ああ、そんなつもりはない。ギルドで問題起こしても得にならないしな。しかし、濡れ衣だとわかったときには、それなりの対応をさせてもらうぜ？ いいんだな」

リキオーはまったく動じていない。

「おいおい、物騒だな。戦争でもするつもりかよ。フツ、連れて行け」

金髪の男が鎧の男たちに向かって顎をしゃくる。

リキオーたちは黒い鎧の男たちに取り押さえられ、武器を取り上げられたうえで、囚人護送用の馬車に押し込まれた。

「マスター、私たちどうなるんですか」

「すぐわかるさ」

馬車がスピードを上げて走りだす。

居心地は囚人護送用とあって最低だ。それでも、みんなで一緒にいれば何も恐れるものはない。

揺れる馬車のなかで、リキオーは右手でハヤテの毛を梳きながら、左手でアネッテを抱き寄せて優しく背中を撫でてやっていた。

「降りろ」

黒い鎧の怒声が車内に響く。

馬車が着いたところは、高く白い塀がずっと続く大きな屋敷である。

リキオーたちは鎧の男たちに捕縛されたまま、狭い通路を下へと連れて行かれた。

どうやらここは地下牢らしい。

目の粗い格子で編まれた牢屋に入れられるリキオーたち。

アネッテは不安そうに、今下りてきた階段のほうを見つめていた。

しかしリキオーにまったく心配している様子はない。ただ面白そうに牢屋スペースをキョロキョロと眺めている。ハヤテに至っては、牢屋を走り回るネズミと追いかけてっことをしていた。緊張感の欠片も感じられない。

「マスター、牢屋に入ってるのに呑気ですね」

「まあな。何事も経験だ。いざとなったらすぐ出られるしな」

いざとなれば正面突破も可能だろう。開発した生活魔法で簡単に抜け出すこともできる。手の内を見せることになるので、あまりいい策とはいえないが。

それよりもこんな退屈しのぎにお誂え向きなイベントを楽しむほうが有意義だ。

そんなことを考えながら、リキオーはアネツテを引き寄せて壁際のベンチに座った。

リキオーがリラックスした様子で焦りを見せないの、アネツテも彼に体を擦り寄せるようにすると、少しは落ち着いていられた。

5 領主の館にて

しばらくすると、鎧をガチャガチャ言わせながら、イストバルへの道中で出会った騎士、ヘルムートがやって来た。後ろには部下のギウンターを連れている。

「ふっ、やはり盗賊ではないか。この大嘘つきめ。このヘルムート様が傭兵崩れの野盗を見誤るはずがないわ」

ヘルムートの勝手な言い分にリキオーが反論する。

「何を言ってるんだ？ 俺たちが野盗だという証拠はあるのか」

「馬鹿め！ お前たちごときに証拠も何もいらんわっ。さる筋からの情報でお前たちの悪事を掴んでいるのだ。もう逃れられんぞ」

聞く耳さえ持ってもらえない。リキオーは、私設の騎士団にありがちな、権力を笠にきた弱い者

いじめなのだろうと考えていた。

ヘルムートが話にならないのは仕方がないとして、その配下がある程度はコントロールできないものだろうか。彼の下に就いていた若い部下は誠実そうだったが。

リキオーは、ヘルムートの後ろで申し訳なさそうにしている少年騎士に声をかけた。

「おい、後ろの。ギウンターとか言ったか。お前もそれで納得なのか？」

「申し訳ありません。団長を諫められなかったのは私の不徳のいたすところでございます。しかし、団長が言うことを受け入れるのも義務でありますゆえ……」

ギウンターが頭を下げる。

結局のところ長いものに巻かれているだけだ。そう思ったリキオーは厳しい口調で言い放った。

「そうか、ではお前たちは敵だな。残念だよ」
そう言ってリキオーはベンチから立ち上がる。そして何の気負いもない調子で、牢屋の前にいたヘルムートの前に立った。

脳筋の野卑な笑いに、リキオーも応酬して笑みを浮かべる。

そして、胸の前で九字を切るような動作で腕を振った。

風を切る音がしたと思うと、カランカランと鉄の棒が地面に落ちた。

牢の格子には、ちょうど人ひとりが通れるほどの穴が空いている。リキオーは腰を落とし、両手を前に突き出す恰好をした。

一連の出来事を目の当たりにし、状況をのみ込めずにいるヘルムートが声を上げる。

「なっ！」

リキオーが波○拳のような構えをする。そしてヘルムートに向けて、手のひらにためた風の塊を放出した。

（インパクトオ！）

「何をッ、げふっ！」

ヘルムートは踏み潰されたカエルのような声を絞り出して吹き飛ばされた。そして向かいの牢屋の格子に体をめり込ませる。

その様子を見た部下たちは驚愕^{きょうがく}を顔に貼り付け、殺気立って剣を抜く。

「なっ、隊長ッ！ か、かかれっ……ぎやうっ」

足の裏に風の生活魔法を込めてスピードアップしたリキオーが襲いかかる。

あっという間に間合いを詰め、相手が気づいたときにはもう遅い。インパクトを受けて複数の騎士と一緒に吹っ飛ばされ、壁に激突して意識を刈り取られていた。

ギウンターが、まるで化物物を見るかのような目をしながら声を上げる。

「あ、あなたは何者です？ どうして素手で戦えるのですか！」

「敵に教える理由はないな。お前たちが俺たちを野盗だと思っているなら、力づくで出て行くまでだ。悪いが腹を立てているのな。手加減はなしだ」

ギウンターが腰に差した剣に手を触れた瞬間。

「ぐふっ……」

リキオーは、ギウンターの懐に飛び込んでいた。

そして、両手を彼の胸に押し当てる。

彼が「馬鹿な」とつぶやくと、まとっていた金属製の板金鎧が弾ける。そして彼は後ろに吹き飛ばしながら意識を失ってしまった。

後ろで、主の戦いを見ていたアネツテが声をかける。

「マスター」

「ちよっと他のやつらも片付けてくるから、ハヤテと一緒にあとから付いておいで」

「はい」

アネツテは優しく微笑んでリキオーを送り出した。ハヤテも「わうっ」と吠えてしっぽをフリフリさせる。

「と、捕らえるッ、少々痛めつけても構わん！」

警備の騎士の声が響きわたる。

リキオーは細い階段を上がっていく。

彼を貫かんと槍の穂先^{ほさき}が無数に繰り出されるが、地面を盛り上げて造った壁でそれらを絡めとる。リキオーのオリジナル生活魔法「アースガード」である。

そのまま駆け上がって近くにいた兵士から槍を奪い取ると、振りまわして一帯の兵士たちを吹き飛ばした。

「ぎゃうッ、ひ、退けっ、閉じ込め……な、なにぃ！」

リキオーの勢いにあわてて逃げ出す兵士たち。扉を閉めて彼を閉じ込めようと画策するが、扉ごと吹き飛ばされてしまう。

屋敷中に警戒を知らせる笛が響きわたった……。

「何事？」

ほっそりとした体つきながら威厳を湛えた美女が、執事に尋ねる。

「はっ、牢から脱走した賊が暴れているようですございます」

「ヘルムートは？」

「それが賊に倒されたようでして。部下も同様に誰も手が付けられません」

「役立たずね」

彼女は、領主エグモントの第一夫人で、屋敷の実質的な主、イライダである。

奥の部屋でくつろいでいる客人に向けて、イライダはチラツと微笑むと、執事に何かを命じて大きくて広い階段を振り返った。

もし賊が頭を潰しに来るのならここを通るしかない。待っているだけで向こうから客はやってく

るのだ。そう考えてイライダは怪しい笑みを浮かべるのであった。

リキオーは相変わらず無双を続けていた。

「撃てっ、撃て撃てっ、なぜ当たらない？ 化け物か」

通路のあらゆるところから、矢や槍がリキオー目掛けて撃ち込まれる。

しかし、矢は風が、槍は土が、それぞれ行く手を阻む。

リキオーには届かないのだ。

彼に矢が到達すると勝手に軌道を変えてあらぬ方向に飛んでいってしまう。そのせいで怪我人も増える一方である。槍も同様にリキオーの前に展開する土壁にのみ込まれてしまえばかりか、そのまま撃ち返されるので迂闊に近づくことさえできない。

さらに、さっきまでいた位置に狙いをつけようと構えると、もうそこにはいない。気づけば近くまで踏み込まれて、ドッカーンと派手な音と共に兵士たちは吹き飛ばされてしまう。

リキオーは、兵士たちを相手にしながら退屈さえ感じていた。

（フンッ、ボスがあれじゃあ、部下も知れてるな）

まともな訓練がなされていてもおかしくないはずだが、トップを失ったせいか烏合の衆と化している。

すっかり及び腰になった彼らを、リキオーは悪人のような顔つきで睨みつける。

すでに屋敷の兵士たちに戦意はなく、リキオーがダンツと足を踏み込んだだけで、大声を上げて逃げていってしまう。

もはやこの屋敷の防衛力は存在しないと言っても過言ではないだろう。

通路を抜けて隠し扉のようなドアを開けると、おそらくレセプションルームと思われる広い場所に出てきた。

きれいに掃除された空間。落ち着いた雰囲気漂っている。

そこから広い階段を上がった先に、一人の女性が佇んでいるのが見えた。

「お待ちください。私は領主エグモントの妻、イライダと申します。どうかお怒りを鎮めてはくたさいませんか」

よく通る女の声のリキオーにかけられた。

リキオーも大声で返答する。

「矛を収めるのは構わないが、どうしてこうなったのか説明を求めたい。こちらはあくまで善意からご令嬢を助け、斬られていたメイドの一人の傷を癒やした。それが、ギルドに向いてみれば犯罪者扱いだ。あなたたちに見返りを求めたつもりもない。こんな仕打ちを受ける謂れはないはずだか？」

リキオーは領主の夫人だという美女を前にしてもまったく臆することはなかった。幾分、戦闘の高揚が残っていたかもしれないが。

イライダは、今回の騒動の原因がヘルムートにあるということを執事より聞いていた。リキオーに向かって謝罪の言葉を口にする。

「本来ならあなた様を歓待してお礼を申し上げなければならぬところを、こんなことになってしまい申し訳ありません。ヘルムートの勘違いが原因でございますが、それも私たちの不手際。あなた様の求めるものは何でもご用意いたします。なんなりとお申し付けください」

夫人は低姿勢だが、どうもヘルムートの言っていたことと矛盾するような気がする。彼は「さる筋からの情報」と言っただけだ。

そう疑問に思いつつ、リキオーは夫人に返答する。

「わかった。こちらの要求は二つ。ギルドに犯罪者指定の解除を求めること。それと金輪際、俺たちに関わることがないようにしてもらいたい。これだけだ」

「わかりました。そのように手配いたしますわ」

領主夫人の傍らに控えていたローブを着た男が階段を下りてきて、ギルドで取り上げていた武器を渡す。一緒に謝礼の金も渡そうとしてきたが、リキオーはそれを拒否した。

リキオーは夫人に一礼すると、アネットたちと合流して正門から出て行った。

夫人はリキオーの後ろ姿を見送ると、客間へとまっすぐに向かった。

そうして、そこで依然としてくつろいだままの客人たちに声をかける。

「どうでしたか？ あの者は。あなたたちのお眼鏡に適いましたかしら」

「ええ、とても興味深いですね。アルブレヒトもそのようですよ」

タルコットは領主夫人におもねるように頷いてみせた。

そもそも今回のことは最初からタルコットの仕込みだった。

領主夫人にとって領主の娘は前妻の子。自分の血筋ではない。そのためタルコットに依頼し襲撃をそのかしたのである。タルコットはそれを利用してリキオーに強盗の嫌疑をかけ、こうして実力を試した。

タルコットの傍らで、リーダーのアルブレヒトが慄然とした表情を見せている。

しかし、パーティ中で彼との付き合いが一番長いタルコットには、彼がここ最近でもっとも機嫌がいいことを見抜いていた。

同じパーティの女性法術士は、これだけの騒動を起こしながら楽しそうにしているタルコットたちに呆れ、やれやれと首を振った。

6 ギルドとの決着

リキオーたちは領主の屋敷を出ると、冒険者ギルドへ向かって歩いていった。

なぜかアネツテが怒っている。

「マスター、また倍力で生活魔法を使いましたね！ 純粹魔法を使う生活魔法は暴走しやすいので危険なんですよ。それにこの世界では目立つちゃうから人前では使わないって約束じゃないですか。もう、言うことを聞いてくれないんですから」

「だって仕方がないだろ。刀を取り上げられてたから戦えなかったし」

お説教モードのアネツテを横目に、リキオーはハヤテの頭をナデナデしながら言い訳をする。ハヤテは尻尾をフリフリしていた。

そんなふうには和やかに会話していたが、急にリキオーは表情を強張らせる。

「次はギルドと喧嘩だな」

「またですか？ 何か面倒ばっかりですね」

「これを何とかすれば少しは静かになるだろう。そう願うよ」

アネツテが非難するようにリキオーを見つめてくる。

リキオーは彼女を抱き寄せた。

アネツテはあんつと可愛い声を出して顔を赤らめるが、彼に誤魔化されてしまうと、不満そうにリキオーを睨んだ。

ギルドの前に着くと、リキオーはアネツテとハヤテに待つように言って愛刀の正宗を抜く。リキオーの姿を見て、ギルド内がざわつきはじめる。



冒険者らしい若い男がリキオーを制止する。

「オイッ、お前っ、ギルド内で騒ぎを起こすのはご法度だぞ」

「関係ないやつは引っ込んでろ！」

リキオーは気合いを相手にぶつけスタンさせるスキル【覇気^{はき}】を発動させた。

【覇気】をともに食らい、男は動きを止めた。

リキオーはその脇を通って、ギルドホールへ侵入する。

そこへ黒い鎧たちが現れた。リキオーを領主の館へ連行したやつらである。

「侵入者を通すな！ 捕縛しろッ」

しかし、リキオーは容赦なくインパクトでふっ飛ばしていく。

屈強な男たちが、それほどガタイがいいとは言えないリキオーに吹っ飛ばされる光景を、周りにいた冒険者たちは哑然として見ている。

一人は受付カウンターを破壊して突っ込み、一人はカフェテリアのテーブルを粉碎しながら壁に埋まっている。そしてまた一人は窓を突き破って外へ叩き出された。

受付カウンターでは、前にリキオーに処分を告げた金髪の若い男が表情を引き攣らせている。

リキオーがニヤリと酷薄な笑いを浮かべて話しかける。

「よう！ 戦争しにきたぜ」

切っ先を受付カウンターの男の顔前に突きつけると、男はヒイツと悲鳴を上げた。

「領主夫人から容疑の取り下げをもらって来た。あとはあんたらの態度次第だ。どうする？」
「わ、わかった、とりあえず剣を下ろせ」

しかし、リキオーは言うことを聞くつもりはなかった。

カウンターに立つ男に切っ先を向けながら、ギルドホールを見回す。

「ギルドマスターはいないのかい？　こんなになっっているってえのに」
刀を突きつけられていたその男が、震えながら声を発した。

「お、俺がこのイストバルの冒険者ギルドのマスター、ローレンツだ」

「へえ、ギルドマスターなのに若いんだな。で、どう落とし前をつけてくれるんだよ」

そう脅されて、若いギルドマスターはリキオーを睨みつけた。

ここに來て度胸を取り戻したらしい。

「お前たちの捕縛命令は取り消す。それでいいだろう？　お前さんだって冒険者なんだ。これから
もギルドを頼るつもりなら引き際は肝心じゃないか、だろ」

ギルドマスターの提案にリキオーは即答する。

「ああ、いいぜ。その代わりに謝罪してもらおうか。それと謝罪金として金貨五百枚。さらに俺たち
限定でギルドマスター専権事項の無効ってところで手を打つぜ」

ギルドマスターの専権事項。

それは冒険者ギルドに登録した冒険者に対してギルドマスターが特定のクエストへの参加を強制

するものである。国家災害級モンスターの討伐や、テロの鎮圧、モンスターの襲撃に対する防衛など、
冒険者の命に関わるクエストが多く、拒否権は認められない。

そもそもこの世界の冒険者ギルドは、傭兵だったりならず者だったりする根無し草の存在を国家
が管理するために生まれたシステムである。冒険者ギルドは、ある意味、国軍の緊急兵力としての
組織にすぎないのだ。

つまり、今回リキオーが要求しているのは、そうした管理からの離脱である。

「な、なんだと、お前、本気で言ってるのか？」

「ああ、本気だ。それほど悪い話でもないだろう。こっちだってこの村に住むんだ。モンスターが襲っ
てきたなんてことになったら、命令されなくなつて参戦するさ」

「……いいだろう」

そう言つてローレンツは深々と頭を下げると、リキオーはようやく正宗を鞘に収めた。

顔を上げたローレンツがリキオーに嘆願する。

「金貨の支払いなんだが、後日にしてくれないか。支払いを抱えてるんでな」

リキオーはさわやかに笑う。

「わかった。悪かったな、恥かかせちゃまってよ。これからよろしく頼むぜ、大将」

「フツ。ところで、いいのかお前、ランクCのままで。どう見てもその強さに見合っていないランク
だろうが」

「こなしでない仕事がたくさんあるんだ、仕方ないだろ」
そう言うと、リキオーは懷から銀貨を適当に取り出した。カウンターにジャラジャラと銀貨が積み上げられていく。

「これで騒ぎを収めてくれ。そこから転がっている奴らの治療代もな」

一瞬言葉を失うローレンツ。そして吹き出した。

「くっ、なんてやつだよ、おめえはよ。てめえら、今日は無礼講だつ、リキオーの奢りだ。ここにある銀貨の分、全部飲んでいけよ！」

固唾をのんでリキオーたちを眺めていた周囲の者たちは、タダで飲める機会を逃すなどばかりに大声を上げる。

ギルドホールは、たちまち冒険者たちの喧騒にのみ込まれていった。ジョッキに酒を酌んだやつらが、ガハハ笑いでギルドホールに漂っていた雰囲気を一気に塗り替えていく。

リキオーはギルドマスターのローレンツに手を振ると、そのままギルドホールをあとにした。外で待っていたアネッテが駆け寄ってくる。

「マスター、もう終わったんですよね」

「ああ、帰ろう。アネッテ、ハヤテ。俺たちの家にな」

「わうっ」

ハヤテが鼻先を摺り寄せてくる。リキオーはハヤテの頭を撫でてやりながら、アネッテと手を繋

いで家路につくのだった。

7 小さな幸せ

翌日、リキオーたちは新居でのんびりと過ごしていた。リキオーはテーブルについて、キッチンに立つアネッテを見ている。お鍋で煮込んでいたものを皿に並べているらしい。

しばらくすると、アネッテは皿を持ってリキオーのいるテーブルまでやってきた。

「お待たせしました」

「おお！ 待ってました。きれいな盛り付けだね。王都のホテルの料理みたい」

「はい、じつはあのホテルのお料理を参考にしてみたんです」

「じゃ、遠慮なくいただきます、んっ……美味しいよお」

料理は肉と野菜を煮込んだスープであつた。薄味だがしつかりとした味が付いていて、肉も野菜も柔らかく美味しかった。付け合せが米ではなくパンだったのは、リキオー的に少し残念だったが、米はなかなか手に入らないので仕方ない。

アネッテはリキオーの傍に立って少し照れていた。そんな仕草がとても可愛い。

「よかったです。マスターにはもう少し味が濃いほうが好みかとも思ったんですけど」